

原南陽の医療とその立脚点

松岡 尚則^{1,2)}, 別府 正志³⁾, 田中耕一郎²⁾, 山口 秀敏⁴⁾
 頼 建守⁵⁾, 中田 英之⁶⁾, 安部 郁子¹⁾
 並木 隆雄⁷⁾, 秋葉 哲生^{2,6,7,8)}, 牧角 和宏⁹⁾

¹⁾公益財団法人研医会, ²⁾東邦大学, ³⁾東京医科歯科大学, ⁴⁾信州医療福祉専門学校, ⁵⁾頼クリニック

⁶⁾練馬総合病院漢方医学センター, ⁷⁾千葉大学大学院医学研究院和漢診療学

⁸⁾伝統医学研究会あきば伝統医学クリニック, ⁹⁾牧角内科クリニック

【緒言】原南陽(1753-1820)は江戸期の医家であり、彼の影響は現在でも乙字湯や安中散などの処方に見られる。

【方法】原南陽の著作および処方から南陽について調べた。水戸市酒門共有墓地に赴き原南陽の墓を調査した。

【結果】墓碑には弟子300人と書かれ、『門人帳』では220名の弟子を数えた。津田玄仙の妻が難病を得て偶々南陽先生に診て貰ったところ非常に速く治ったため、『叢桂亭医事小言』では津田玄仙が序文を書いていた。『南陽百問評』には吉益南涯、華岡青州の考えに対して、自らの考えを加えていた。この書に対して、中川修亭が原南陽へ回答されたいと手紙を書いたが、原南陽は婉曲的に断っていた。『南陽先生遺稿』では寄平安中川修亭、寿南冥亀井先生聞時罷官が七言律詩で書かれていた。『叢桂亭医事小言』には、明の沈応暘に『傷寒十勸』を引用し、『叢桂亭蔵書目録』では傷寒に関する蔵書として『傷寒百問』『傷寒集話』『傷寒弁正』『傷寒名数解』『傷寒六書』『傷寒古訓』『傷寒通言』『傷寒論分註』『傷寒証治明条』『傷寒名理論』『傷寒標本心法』『傷寒古訓後篇』『傷寒論条弁』『傷寒尚論篇』がみられた。『傷寒論夜話』の子文に中西深齋の説を引用して解説しており、『傷寒論弁正』と『名数解』を尊重していたと考えられた。また、『傷寒論夜話』は太陽病に始まり少陽までで終わっていた。

水戸藩での原南陽の石高はもともと百五十石で京都遊学より前に家督を21歳で継いでいた。最終的な石高は三百石であり、森立之『遊相医話』が示す五百石とは異なっていた。

【総括】原南陽は山脇東門、賀川玄迪、皆川淇園、戸崎淡園に学んだ。原南陽の処方は、その学派で考えると理解可能なものが多くみられた。『遊相医話』の内容が正しいものかどうかは不明な点が多いが、当時、このような噂が流れるほどの腕前であっただろうと考えられた。